

"Soldier's Home" — 家族の肖像

奥村直史

"Soldier's Home"は、短編集 In Our Time (1925) の第7章に位置する。第1章から5章までの主人公Nick Adamsは姿を消し、この短編には Harold Krebsが主人公として現れる。' ニックの名を使わなかったのは、おそらく両親への遠慮からだろう。ヘミングウェイには、冷徹になり切れず「孝行息子」を演じるどころがあったのだ。ニック・アダムズには、あまりにも濃い自伝的影を背負わせていた。しかし "Soldier's Home" は、ある意味ではニック・アダムズもの以上に自伝的なのだ。母親との間に、どれほど深い溝があるかが描かれている。この作品を読む両親が悲しむのは間違いない。しかし、書いてしまわなければどうにも收拾のつかないものが、ヘミングウェイの内部にうごめいていた。

そこで主人公の名前だけでなく、いくつかの変更がなされた。舞台は、ヘミングウェイ及びニックとは無関係の、オクラホマ州にある町に設定されている。宗派もヘミングウェイ家の組合教会 (Congregational Church) ではなくメソジストとなり、主人公が従軍したのも海兵隊とされ、フランスで戦ったことになっている。ヘミングウェイはイタリア軍つき赤十字要員として出征し、フォッサルタで負傷した。宗派を除けばどれも些細な変更である。生涯を通して、ヘミングウェイは自分の故郷オーク・パークについて書くことはなかった。すべてを捨てて物書きになるというのは困難なことなのだろう。

この作品は、1919年に第一次大戦から帰還した青年クラブズの疎外感を扱っている。同じく1919年にヘミングウェイも帰還したのだが、その後、両親との関係がぐすぶり出した。毎日イタリア系の客を家に招き、夜半にまで及ぶ騒々しいパーティを行う息子に、父クラレンスも母グレイスも、もはや寛容ではいられなくなってきた。この頃のヘミングウェイは、戦争で受けた肉体的そして精神的傷のほかに、将来に対する不安も少なからずあったのだ。習作はいくつかあったものの、文学一本に選択肢を絞るふんぎりも、自信もなかった。シャーウッド・アンダソンに出会い励まされるのは、1921年の初めである。また、イタ

リアで知り合い、結婚まで心に決めていたアグネス・フォン・クロウスキーからは、心変わりの手紙が届いた。² 別の男と結婚することになったというのである。そのような時に両親は、早く仕事を見つけて身を固めろと急かした。これ見よがしの軍服姿で町を闊歩するヘミングウェイに悪い噂も立ち始めた。女の子を誘うためのポーズだと思われたのだ。オーク・パークはビクトリア朝の雰囲気が残るお上品な町だったのだ。このような事情から、翌年の1920年夏には、ついに親子の衝突は避けられなくなり、ヘミングウェイは出入り禁止の最後通牒を言い渡されることになる。

しかし、この時の事情は複雑である。後に、ヘミングウェイと母親の不仲は良く知られるところとなり、またそのことが強調されるのだが、父、母、息子の力関係に微妙な揺れが見え始め、ついに平衡を失ったようだ。ただ、父親と息子の直接対決はどちらからともなく避けられている。息子に対する要求、あるいは忠告はほとんど手紙を通して行われた。ヘミングウェイ家は毎年、夏をミシガン州北部のワルーン湖畔にある別荘で過ごすことにしている。この別荘は、母方の祖先の国イギリスにある、ワーズワスも好んだことで知られる湖に因んで、グレイスがウィングミアと名付けた（綴りは一字違うのだが）。6月4日、一足先にミシガンに来ていたヘミングウェイに、診療の仕事が片づかないクラレンスは、母と妹たちを出迎えるよう手紙を書いた。48才のグレイスは、情緒不安定に苦しみ体調が思わしくなかったからだ。

この情緒不安定は前の年から始まっていた。更年期障害のためだとする伝記作家もいるが、³ 19年には新たな別荘を建てる計画を立て、夫との間にすれ違いが生じた。グレイスには、ウィングミアでの息の詰まる生活を離れ、一人になれる自分だけの別荘を建てたいという願いがあった。春には、ウィングミアで毎年過ごす夏の生活は、自分を神経衰弱に陥らせると訴える手紙を書いたが、新たな別荘の件は夫には聞き入れられなかった。しかし、夫の同意を得られぬまま、ウィングミアとは湖

を隔てて反対側にある丘の上に、19年の夏のうちに別荘を建て、グレイス・コッティジの名をつけた。二つの別荘ともグレイスが自分の側に因んだ名を付けたことになる。ヘミングウェイのファーストネームとミドルネーム、アーネストとミラーも、それぞれグレイス側の祖父と大叔父から取られているのだ。それだけでなく、6人の子供のうち父親側の名前がつけられたのは、ヘミングウェイの弟レスターのミドルネーム、クラレンスだけである。とにかく、自分の意向を無視された夫、クラレンスの胸中は穏やかではなかっただろう。グレイスと結婚した当初、まだ駆け出しの開業医で収入も十分ではなかったクラレンスは、義父アーネスト・ホールが家長を務める妻の実家に同居した。年収2000ドルの夫に対し、妻は声楽の個人指導料などで月額だけでも1000ドルの収入があったという。⁴ それ以来、家の中でのクラレンスの立場は微妙なものになったようだ。新たな別荘の建設にはヘミングウェイも反対したのだが、そのことにはまた後で触れる。

複雑な事情はあるものの、クラレンスは未だ体調のすぐれない妻が子供たちとウィングミアの別荘に入るのを手伝うよう、ヘミングウェイに出迎えを命じた。しかし、息子は仲間と近くの町、ホートンベイで過ごし、姿を見せなかった。友人のテッド・ブランバックとサンフランシスコから船出し、東洋を廻るという計画を母に反対されたことが尾を引いていたのかもしれない。その時ヘミングウェイは激怒している。6月4日の手紙でクラレンスは息子に次のように書いている。

Do hope dear Ernest that you will think more of what others have done for you and try to be charitable and kind and gentle. Do not doubt that I am proud of your ability and independence, but try and soften your temper and never threaten your Father or Mother.⁵

息子は既に手に負えなくなってきたのだ。

1 か月後の7月初めに、ようやく診療の仕事の引き継ぎを終えたクラレンスがウィンダミアに合流した。しかし、そこでの2週間の滞在のあいだに息子と直接向かい合うことはなかった。いくつかの仕事を言いつけるにとどまり、またオーク・パークに戻っている。それらの仕事が無くなったと思った父は、報酬としての5ドルと、7月21日の21才の誕生日のための5ドルとの、合わせて10ドルを息子に送った。しかし、言いつけは守られてはいなかったのである。誕生日の翌日にそのことを知ったクラレンスは、妻に当て次のように書いている。

I think Ernest is trying to irritate us in some way, so as to have a witness in Brummy in hearing us say we would be glad if he was to go away and stay . . . I will write to him and enclose herewith for you to read and hand to him.⁶

ブラミーはイタリア戦線で一緒だった仲間、ヘミングウェイと共に東洋へ行こうと計画した、テッド・ブランバックのことである。父親は息子が両親と手を切るきっかけを待ち構えているのを嘆き取っている。息子宛に同封しようとしている手紙とは次のものである。

Try and not be a sponger. . . . It is best for you [and Ted] to change camps and go to new fields to conquer, it is all together too hard on your mother to entertain you and your friends, when she is not having help and you are so hard to please and are so insulting to your dear mother. So please pack up and try elsewhere until you are again invited . . . to Windemere.⁷

居候にならぬこと（テッドとヘミングウェイはウィンダミアの一室に寝泊まりしていた）、手伝いもせず気難しく構え、悪態ばかりつく息子をもてなすことなどお母さん（グレイス）にはできないこと、よって再び招かれるまで出入り禁止にすることが告げられている。少なくとも4日

前の18日以前にも、ここまできっぱりとではないが、ウィングミアを離れるよう示唆する手紙が直接ヘミングウェイに出されている。21日の誕生日には、皿洗いやごみ捨て場の穴掘り、またペンキ塗りなど、家庭の仕事をヘミングウェイはせっせと手伝っている。父親の手紙が効いたのだろう。

しかし、22日付けの出入り禁止の手紙は、妻グレイスを経由してヘミングウェイに渡るよう取り計らわれた。中身を読んでから息子に渡すようクラレンスは言っている。手のつけられない息子に対する妻の苦情が、オーク・パークにいる夫に訴えられていた。この手紙は、妻への気遣い、そして父親の責任をも果たしていることが伺える内容なのだ。ひとつ気にかかるのは、25日と26日に連続して、既にその手紙を読み、ヘミングウェイに手渡していることを望むという手紙を妻に送っていることだ。⁹ 手に負えなくなった息子がこれ以上情緒不安定の妻を刺激し、ごたごたを引き起こしては困るという考えも勿論あったのだろうが、それ以外の懸念はなかったろうか。

グレイスが、その夫の手紙をヘミングウェイに渡したのは、26日の朝である。その時までには彼女は、"My Dear Son Ernest," に始まる長い手紙をヘミングウェイに書いている。日付けは24日となっているが渡されたのは27日の朝になってからだ。内容はクラレンスと同様、息子をしばらくのあいだ勘当にするといったものだが、まるで後に残ることを考えて書いたかのような、比喩の多い凝った文章なのだ。母親の愛情を銀行預金に喩えている。グレイスは、この手紙の写しを取っておき、1か月以上もあとの9月2日になってから夫に見せている。クラレンスはそれが傑作であると妻に告げている。⁹ この時の、夫であり父でもあるクラレンスが、どのような思いを内に秘めていたのかはわからない。だが、自分の出した通告を妻が再び彼女自身の文章に乗せて出し直したのだ。しかし、そのグレイスの手紙がヘミングウェイに渡されるのは、ある事件の後である。

クラレンスの手紙が26日の朝に手渡されると、ヘミングウェイは、また猛然と家の仕事の手伝いを始めている。その時の模様をグレイスは次のように夫に報告している。"Your letter I handed to Ernest on Monday morning. . . . After reading it, he chopped a few pieces of wood, enough for 2 days, about, then he tried to fix the pier, and did after a fashion though it is very wobbly."¹⁰ 前回と同様、父親からの出入り禁止の通告に対して、ヘミングウェイはおとなしく家の手伝いをするという反応を示している。しかし、この日の夜に、母親との関係を決定的にさせる出来事にヘミングウェイは関わった。母親の方でも書いておいた手紙の出番が早速きたのだ。

ヘミングウェイの妹、アーシュラ（18才）とサニー（15才）がボーイフレンドと共に真夜中のパーティを開く計画を立てていた。一緒に行くのは近くに別荘を持つルミス家とそこに遊びに来ている子たちの合わせて4名。女の子の数が二人多いので、サニーたちは兄アーネストとその友達テッドと一緒に来るよう頼み、カップルがちょうど4組できるようにした。彼らは真夜中にそっと別荘を抜け出し、外に隠しておいた食料を持ってボートとカヌーに乗り込み、湖の西、ライアン岬へと向かった。そこで焚き火をし、飲み、食い、テッドの奏でるマンドリンに合わせ歌った。それ以上のことがあったかどうかはわからないが、彼らが楽しんでいる間に、ルミス夫人が子供たちのいなくなっていることに気づき、夜中の3時に怒り心頭でグレイスのところに怒鳴り込んでいる。ルミス夫人は年長者であるヘミングウェイとテッドを責めた。

翌日、27日の朝、ルミス家の別荘に謝罪に向いたヘミングウェイは、面会を拒絶されている。その日の朝のうちに、ヘミングウェイはグレイスから、ウィングミアを出ていくよう告げた例の手紙を渡されるのだ。12段落から成る長いものなのですべては引かないが、前半の1段落と後半部分を見てみることにする。

A mother's love seems to me like a bank. Each child that is born to her, enters the world with a large and prosperous bank account, seemingly inexhaustible. For the first five years he draws and draws — physical labor and pain — loss of sleep — watching and soothing, waiting upon, bathing, dressing, feeding, amusing. The Mother is practically a body slave to his every whim. . . .

. . . Unless you, my son, Ernest, come to yourself, cease your lazy loafing, and pleasure seeking — borrowing with no thought of returning — stop trying to graft a living off anybody and everybody — spending all your earnings lavishly and wastefully on luxuries for yourself — stop trading on your handsome face, to fool little gullible girls, and neglecting your duties to God and your Saviour Jesus Christ — unless, in other words, you come into your manhood — there is nothing before you but bankruptcy: You have overdrawn.

This world, which is your world, is crying out for men, real men, with brawn and muscle, moral as well as physical — men whose mothers can look up to them, instead of hanging their heads in shame at having borne them. . . . You were named for the two finest and noblest gentlemen I have ever known. See to it that you do not disgrace their memories.

Do not come back until your tongue has learned not to insult and shame your mother.

When you have changed your ideas and aims in life, you will find your mother waiting to welcome you, whether it be in this world or the next — loving you and longing for your love. (emphasis added)¹¹

子供は生まれるのと同時に、母親の愛情が支配する世界に入ること、息子は神に対する義務を怠っていること、この世でもあの世でも母は待ち続けていること、これらに対してヘミングウェイは "Soldier's Home" の中で敏感に反応している。「世界」という語がキーワードだ。母親の世界にあって自分の世界を築くことなど不可能であり、矛盾するのだ。グレイスが自分の側の高貴な家系を汚すなどと言っている点にも注目したい。もちろん、息子を愛するがために、最善と思える忠告をグレイスは与えているのだろうが、それらをヘミングウェイはどのように受け取ったであろうか。

どういうわけか母親と同名の14才の少女、グレイス・クィンランにヘミングウェイは理解を求めている。ただ、その名は呼ばずに "Sister Luke" という愛称を使っていたのだが。そもそも退屈なパーティーになど行きたくはなかったこと、ルーミス夫人が大騒ぎしたこと、そして十分な釈明も許されぬまま、家を放り出されたことを述べた後で次のように続けている。日付けは「事件」から10日後の8月8日である。

Mother was glad of an excuse to oust me as she has more or less hated me ever since I opposed her throwing two or three thousand seeds away to build a new cottage for herself when the jack should have sent the kids to college. . . .

But isn't that the most ridiculous thing to get kicked out for? Have three or four letters from them that I haven't even opened so don't know what the latest dope is. Am so darned disgusted I don't care to have anything more to do with them for a year at least.¹²

グレイス・コッティジを建てることに反対したため、母は自分を憎んでいるとヘミングウェイは考えた。母親に対する感情はかなり屈折しているのだ。自分は大学に行く気などなかったのだが、別荘を建てる金 (seeds, jack) は子供たちが大学に行くために使われるべきだと言ったようだ。しかし、この屈折は父親に対する同情、家の中でも母親に傾いた力関係を、父の側に引き戻そうとする心理作用から生じたのではないか。別荘の件では父に味方する形になっているのだ。そのことは別にしても、当時のヘミングウェイの幼さ、甘えはそうとうなもので、怒りに任せ親との接触は絶つと意気ごんではいるものの、「少なくとも1年は」などという期限がついているのだ。ヘミングウェイは仕事の当てがないままホートン・ベイの果樹園で林檎もぎのアルバイトをして食いつないだ。友達には、キャンザス・シティ・スター紙が、給料は言い値で自分のことをほしがっていると大見得を切った。¹³戦前に父親のコネでようやく雇ってもらった新聞社だ。

わだかまりを残しながら、敬虔で指導的立場に君臨する母、規律には厳しいが家長の座にはつけない父、そして時にエゴがむき出しになる放蕩息子の関係は続いてゆく。1949年に版元のチャールズ・スクリプナーに宛てた手紙で、この親子の関係を締めくくろう。父はもうこの世にはなく、母は77才でアルツハイマー病の症状が出始めている。

My mother is very old, her memory is more than spotty and she is addicted to fantastic statements. Lately, because she is so old, I have played the role of a devoted son in case it pleased her. But I hate her guts and she hates mine. She forced my father to suicide and, one time, later, when I ordered her to sell certain worthless properties that were eating her up with taxes, she wrote, "Never threaten me with what to do. Your father tried that once when we were first married and he lived to regret it."¹⁴

父を自殺に追い込んだ女というくだりは、何とも生々しい憎しみ、遠ざけ方だが、その母を喜ばせようと「孝行息子」の役割を演じたのもまたヘミングウェイである。この作家の気質がよく表れた手紙だと思う。こここのところが"Soldier's Home"のクラブズに反映しているのだ。

"Soldier's Home"は青年クラブズが、嘘や誇張によりすべてを失う話である。第一次大戦を経ることにより、彼の心と体は大きく変化する。"Krebs went to the war from a Methodist college in Kansas."¹⁵の一文でこの物語は始まり、それに続く2枚の写真の描写が、彼の変化を強調する。一枚目は大学の友愛会の仲間と一緒に写った写真で、皆が「まったく同じ高さと同様のカラー」(exactly the same height and style collar, 145)をつけている。クラブズが戦前、伝統的プロテスタント社会の標準的一員だったことを示している。メソジストは道徳を重んじるプロテスタントの一派だ。2枚目は、帰国前にライン河畔で写したもので、二人のドイツ娘ともう一人の伍長、そしてクラブズがいる。

「ドイツ娘たちはきれいではなく、ライン川は写っていない」との説明は、彼女らが敗戦後のドイツで働く娼婦であることを暗示する。もはや道徳からは遠いところにいるのだ。また、軍服がきつそうに見えるという描写は、クレブズの肉体的変化ばかりでなく、"uniform" という語が示す「ひとつの形」には取まらない、精神的変化をも表しているのだ。

クレブズが失ったものには、表題にある「ホーム」（故郷／家庭）がある。しかし、その失い方に、最初は積極的だった節があり、故郷脱出の願望が潜んでいたことを覗かせている。実際、彼と同じ町の者は「召集された」（drafted）とあるのに対し、クレブズは「志願した」（enlisted）のであり、その積極性が見てとれる。おそらく母親の意のままに、宗教的な道徳が支配する環境に閉じ込められていたのだろう。母親を泣かせてしまうと、嫌悪しながらも嘘をはらんだ言い訳をしまうほど、ひどく痛む良心を持った青年なのだ。「何とかお母さんのいい子になってみるよ」とも言うてしまう性質である。このような彼にとって、戦争は「故郷」を抜け出す絶好の機会だったのだ。「戦争が終わってから何年もたって」（years after the war was over）¹⁸戻ってきたのも「故郷に戻りたくはなかった」からなのだ。"He did not want to come home. Still, he had come home." (148)

どのような形で再出発するにせよ、一度は戻らなくてはならないのが故郷である。しかし、帰還兵クレブズは、故郷が自分の居るべき場所ではないことを痛感する。また、いかに彼が故郷を受けつけないのかも、否定形 "not" を驚くほど多様、反復する文体によって強調されているのだが、まずはクレブズと町の関係から見ていこう。彼の戻った町では既に戦争の話に飽きがきており、「アクチュアリティ」が意味を持たなくなっている。話を聞いてもらうためには嘘や誇張が要求され、クレブズもささいな嘘を2度ついてしまう。そのために彼は、戦争で見いだした「クールで貴重な特質」を失ってしまうのだ。

All of the times that had been able to make him feel cool and clear inside himself when he thought of them; the times so long back when he had done the one thing, the only thing for a man to do, easily and naturally, when he might have done something else, now lost their cool, valuable quality and then were lost themselves. (145-6)

戦争に行っているあいだ彼は、「男がなすべき唯一のことをやすやすと自然に行う」という単純な世界におり、自分の身に起ったことを考えると「クールでクリアー」に感じられた。これらが貴重な特質なのだ。反対に、帰還した彼の故郷は、関わり合うには嘘や誇張が要求される複雑な世界である。その「結果」(consequences)に、つまり嘘や誇張により「クールで貴重な特質」を失ってしまうことに、クレブズは「嘔吐」(nausea)を催す。この「結果」を恐れ、クレブズは言葉まで失ってしまうことになる。

町の複雑さを最も良く表しているのが、若い女性たちだ。「町で変わったのは幼い女の子たちが大きくなったことだけだ」(Nothing was changed in the town except that the young girls had grown up, 147)とあるが、この変化は重大だ。もはや思考と言動、あるいは思考と行動が一致する、単純で無垢な世界の住人ではなくなっている。彼女たちは、「既に固まった同盟や、絶えず移り変わる争いのある複雑な世界」(a complicated world of already defined alliances and shifting feuds, 147)に居るのだ。そして、否定形を反復する文体が、彼女たちの住む世界との隔たりをより強調する。

Vaguely he wanted a girl but he did not want to have to work to get her. He would have liked to have a girl but he did not want to have to spend a long time getting her. He did not want to get into the intrigue and the politics. He did not want to have to do any courting. He did not want to tell any more lies. It wasn't worth it. (147)

もしクルブズが彼女らとつき合おうとすれば、「術策や駆け引き」(intrigue and politics) を労さなくてはならない。嘘を誘発する存在なのだ。クルブズが望むのは、既に見たような「結果」のない生き方である。フランスやドイツ娘たちにはそれがあった。"It was simple and you were friends." (148) ことは単純だったのだ。町の若い女の子とクルブズの隔たりを最も端的に表しているのは次の一文だ。"But the world they were in was not the world he was in." (148) 住む世界の違う女の子たちがいる町で、彼は異邦人とならざるをえない。¹⁷ ただ嘘が入り込まぬよう黙り込み、家のポーチから「通りの向こう側」(the other side of the street) にいる彼女らを眺めるだけなのだ。

唯一、幼い妹、ヘレンとの関係では嘘が入り込んでも彼の「嘔吐感」は現れない。14才の少女、「シスター・ルーク」ことグレイス・クインランが想起される。ヘレンが「恋人になってくれるか」、「私を愛しているか」とクルブズに訊くと、「もちろんさ」(sure)と答えている。二人を取り囲む宗教的倫理観からして、先の質問の答は"No"だろう。後の問いについても、地の文では"He liked her." とあるだけで"love"という語は使われていない。妹が言う意味での「愛」とはクルブズに違和感を持たせるはずの言葉だ。しかし、これらの嘘に、あの「結果」はない。なぜなら、妹は単純でイノセントな世界におり、クルブズは彼女がピッチャーを務めるソフトボールの試合を見に行くことで、彼女に対する愛を証明できるのだ。だが、やがては、町の女の子が大きくなったように、妹も成長し複雑な世界へと入ってってしまうのだろう。

それではもうひとつのホーム、家庭の方はどうだろう。クルブズの父親は「どっちつかずの」(non-committal) 人物とされ影が薄い。戦争に行く前は禁じていた家の車の使用も、妻を通して息子に許可する。反対に母親に対する言及は多く、この家の支配者といった感がある。勿論そう描いているのは、母親を赦してはいない作家ヘミングウェイなのだ。車の件を知らせると、クルブズは「お母さんがそうさせたに決まって

る」と2度まで繰り返して言う。息子は母親にそうした力があることを知っているのだ。母親に対する否定的要素は更に描き込まれる。彼女は頻繁にクレブズのいるベッドにやって来ては、戦争の話聞かせてほしいと頼むのだが、本気で息子の話に耳を傾けることはない。クレブズの嫌悪する偽りの姿なのだ。帰郷後1か月で二人は衝突する。

母親の信奉する「神の御国」(His Kingdom) と息子の求める「自由」(freedom) の対立である。母親は宗教的倫理観に基づき「神の御国になまけ者は許されない」とクレブズに仕事に就くよう説く。「僕は神の御国になんかいやしません」と答えるクレブズに「私たちはみな神の御国にいるのよ」とその姿勢は崩れない。二人は物理的には同じ家の中に住むものの、精神的には信じる世界も住む世界も共有してはいないのだ。クレブズは「クールで貴重な特質」を守るべく、努めて嘘を排除しているわけだが、母親はそれを許さない。「お母さんを愛していないの」(Don't you love your mother, dear boy?) という残酷な問を発してクレブズを追い込む。もはや"dear boy"と呼ばれる歳でもなく、また大げさで抽象的な「愛」などと言われ、¹⁸クレブズは「ええ」(No)と答え、「誰も愛してなんかいらないんです」と、真実を告げてしまう。母親の涙に良心が痛むクレブズは「そんなことを言うつもりはなかった」「何かに腹を立てていただけだ」と嘘の弁解をしてしまうのだ。「お母さんはおまえがちっちゃな赤ん坊だった時この胸に抱いたんだよ」と続けられると、クレブズは気分が悪くなり、嘔吐を催している。ヘミングウェイの母親、グレイスの手紙に思い当たるところだ。

更に、「神の御国」にはいないクレブズにとっては嘘になる祈りを母は強要する。祈ることはできないという息子に、「代わりに祈ってほしいかい」と訊き、息子は「ええ」と承知する。母親を捨てきれないクレブズの性質が妥協を許してしまうのだ。しかし、このような妥協には「嘘」が伴うのであり、あの「クールで貴重な特質」は失われてしまうことになる。どのみち、「兵士の故郷/ 家庭」に心の休まる場所、ホー

ムはなく、クレブズは家の中でもなく、また外でもないポーチで多くの時間を過ごす。そこで、一人黙り込むことにより「非真実」(untruth)を締め出し、自分が参加した戦いと歴史書にあるその記述を照合することにより、真実を探求するのだ。

しかしこのままでは、母親を"Mummy"と呼ぶ子供の役(ヘミングウェイの手紙にある"devoted son")、偽りの自分をクレブズは演じ続けなくてはならない。結末の部分は、彼がキャンザス・シティーに向かうことを予期させているが、母親を満足させるための仕事探しでは、心休まる「ホーム」は見つからないだろう。それは、既に引用した「クールでキャリアー」な感覚という表現がそのまま当てはまる川の流れる"Big Two-Hearted River"の世界にあるのだ。そこでは話す必要も、ましてや嘘をつく必要もなく、真実の自分をありのままに自然が受け入れてくれる。ニックはそこに自分だけの「ホーム」を定めた。¹⁰ クレブズが「脱出」して向かうべき先は、まさにそのような場所なのだ。

注

1 これはヘミングウェイの友人、Krebs FriendとHarold Stearnsの名を組み合わせたものである。フレンドもシェルショックに悩む復員兵だった。1924年にはフォード・マードックス・フォードが主宰するtransatlantic review誌を救う資金援助をしている。Paul Smith, A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway (Boston: G. K. Hall, 1989), 70.

2 裏切られたと感じたヘミングウェイはIn Our Time 第6章の短編"A Very Short Story"を書くことでアグネスに復讐している。1919年3月7日に書かれたこの手紙の全文を読むことができる。Henry Villard, James Nagel ed., Hemingway in Love and War: the Lost Diary of Agnes Von Kurowsky (New York: Hyperion, 1996), 163-64.

3 Kenneth S. Lynn, Hemingway (New York: Simon and Schuster, 1987), 99.

4 Michael Reynolds, The Young Hemingway (New York: Basil Blackwell, 1986), 106.

5 Hemingway, 115.

6 James R. Mellow, Hemingway: A Life without Consequences (Boston: Houghton Mifflin, 1992), 118.

7 Carlos Baker, Ernest Hemingway: A Life Story, (New York: Scribner's, 1969), 71.

8 Hemingway: A Life without Consequences, 118.

9 Ernest Hemingway: A Life Story, 73

10 Hemingway: A Life without Consequences, 119.

11 Hemingway, 117-18. 以下、下線による強調はすべて筆者。

12 Carlos Baker ed., Ernest Hemingway: Selected Letters, 1917-1961 (New York: Scribner's, 1981), 37.

13 Ernest Hemingway: A Life Story, 73.

14 Selected Letters, 670.

15 Ernest Hemingway, The Short Stories of Ernest Hemingway (1966; New York: Scribner's, 1987), 145. 以下この作品からの引用は本文中にその頁数のみを記す。

16 休戦になったのは1918年の11月で、クレブズは19年の夏に戻ってきたとあるから「何年も」とは言えないが、草稿の段階では20年に帰還したことになっている。A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway, 72.

17 コリン・ウィルソンは実存主義的な立場からこの作品を扱っている。Colin Wilson, The Outsider (London: Victor Gollancz, 1958), 32-3.

18 ヘミングウェイの描く世界では抽象語は「汚らわしい」(obscene)とされる。A Farewell to Arms (1929; New York: Scribner's, 1986), 185.

19 拙論「"Big Two-Hearted River" — ニック・アダムズのケレンシア、そしてセザンヌ」『アメリカ文学』第58号(日本アメリカ文学会東京支部会報、1997)参照。

※ 本稿は1995年7月22日の日本ヘミングウェイ協会ワークショップで行った口頭発表の原稿に加筆したものである。